

第 52 話<前近代経営>の要約と参考資料

第 52 話<前近代経営>の要約

外録鉦山の組織は、川田さんを頂点に、竹内氏が権利をもつ採掘部門と佐伯の業者による亜ヒ酸製錬部門に分かれていました。採掘部門をになったのは、鉦山の地主だった佐藤利喜治さんの一族。貧しい農民を基底において、縁故雇用と請負い労働で成り立っていました。

第 52 話<前近代経営>の参考資料

5 2 - 1 佐藤利喜治さんの一族

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」(P43~44) より

鉦山の再開を心待ちした利喜治じいやんが、大正 9 年 5 月に死んだ。翌 6 月には、休山しておった鉦山が亜砒鉦山^{あひやま}に変身して賑い始めたんじゃき、皮肉なものよの。藤じいさまと利喜治じいやんの遺志は、喜右衛門さんに引き継がれた。喜右衛門さんは最初から、鉦山に協力的だった。政市つあん夫婦を亜砒焼きに誘うたのは喜右衛門さんじゃ。繁熊少年が手子になったころは、鉦業権者の竹内令さくから二番坑の採鉦を請負うち、坑内で指揮をとっておった。

利喜治じいやんは、おモヨばあやんの前に種という嫁女をもろちよる。病死した種さんとの間に、タカという娘がおっての。おタカさんは上村^{かむら}の政太郎さんの嫁女になって、砂太郎、イセノ、勝次郎、暁^{さとる}……と 10 人の子を産んだ。長男の砂太郎やんはそころ三番坑の採鉦を請負い、次男の勝次郎やんは二番坑で叔父の喜右衛門さんの右腕になって働いた。三男の暁さん、喜右衛門さんの弟百熊さんも、鉦夫として坑内に下がった。こうしてみると、大正時代の土呂久鉦山で採鉦の采配を振るうたんが、利喜治じいやんの一族だったことがわかるじゃろう。

5 2 - 2 亜ヒ酸鉦山で働くようになった理由

鶴野政市・クミさんの場合

佐藤実雄さんの話 (1976 年ごろ聴取)

「樋の口」の勝手口にそぎ葺でさしかけた小屋があった。政市さんはここに住んでいた。私 (実雄) が樋の口に奉公に行ったころ、政市さんは名子だった。10 年間、名子の名目で田畑一式を作付けして歩合でとりよった。田 7 反と畑が 5 反以上、合わせて 1 町何歩か、いちばん肥えた、いちばん広い田を借りて作った。ところが 10 年間おる契約だったのに、政市さんは何年おったか。大正 9 年に亜ヒ酸焼きが始まると、名子

をやめてしまった。10年の契約を破棄して、鉾山の方がよいというんで。

鶴野クミさんの話（1976年ごろ聴取）

亜ヒ酸が毒ちゅうことわからなかった。煙は臭いけど、体に害するとはわからずに。樋の口の畑は何町歩もある。そこを作って「半分」もらった。作男ですけど、あとで話し合いはできん。「分け作」です。

9月に嫁に行った。まる1年そこそこで、樋の口から鉾山に移った。経験もなく、不安でありながらも、独立した仕事だったから。そのころ、他にお金取りがなかった。分け作でとったところで、どうにもならなかった。喜右衛門さんが最初は亜ヒ酸を焼いていた。わたしゃ（クミさん）喜右衛門さんになった。

難しいのは火のやり方だけじゃもんな。火が激しいと、亜ヒ酸が逃げてしまう。1号窯に残らん。1号窯はそのまま製品になる。2号、3号の粗製亜ヒ酸はもう1回焼き直し。請負いじゃなきゃ、あんな仕事はできない。大量にやると無理。わずかな利益だった。日役とりよりかよかった。窯は鉾山の窯だが、修理は自分でやる。いっぱいひび割りができて、窯の周囲に煙がでよったので、粘土つけて、煙が横から出らんように修理した。一日働いたら、地下足袋とか服とか、すぐボロボロになって、破れてしまいった。

竹治さんは、だいたい鉾夫だった。鉾石掘りが専門だった。政市さんの手がいるときは、亜ヒ酸を手伝った。

政市さんはずっと事務所の横で働いた。昭和2年にやめて、いま杉を植えている20町歩の山を買い受けて、その山（傾斜の激しい雑木林）でヤボ作をした。政市さんのあとを継いだのが、朝鮮人の徳村（延岡で死んだ）と金山（土呂久で死んだ。墓がある）。

（以下、1981年11月24日聴取）

結婚式の次の日から樋の口に行った。母屋のつづきに小さい部屋があった。6畳の畳の部屋一間。炊事場も便所も外。ここに政市さんと2人で住んだ。それから2年くらい百姓をした。牛や馬を引いて、朝早くから草切りに行くことやった。草を束にして、4つも5つもからいよった。私たち夫婦で樋の口の田畑をみな作った。助さんたちは、現金になるナバ山をしょった。助さんの兄ちゃんの年保さんは、鉾山好きで百姓はさっさん。鉾山が始まって、喜右衛門さんが「銭とりになる」と勧めた。名子は米をちっとももらっただけ。それで変えたわけない。助さんは、鉾山のつとめに出るのに反対したが、政市さんは借金を返さんといけんかった。

佐保ミサさんの場合

生熊来吉「砒素の烙印」（「怨民の復権Ⅱ」）（P124～126）より

（佐保兄弟の父）徳四郎さんが何年にいくつで死亡したか憶えていない。話の辻褃

を合わせてみると大正 10 年頃のことらしい。6 人の子供を抱えて、一家の大黒柱を失ったミサさんは呆然としたことであろう。しかも悪いことには、小学校を卒業したばかりの長男五十吉さんが大酒を飲んで、そのために郷里の土地が人手に渡ってしまった。(略)

その頃、同郷の鶴野政市さん、クミさん夫妻が数年前から本格化した土呂久鉱山の亜砒焼に従事していた。人の好い鶴野夫妻は、路頭に迷っているミサさんを鉱山労働者の風呂焚きに世話した。一家 7 人は鉱山住宅に移り住むことになった。(略) 土呂久転入は大正 11 年のことであろう。

木山今朝市さんの場合

木山今朝市さんの話 (1979 年 11 月 7 日聴取)

明治 31 年 11 月 19 日生まれ。五ヶ瀬町鞍岡出身。母 1 人子 1 人で農業をしたことはありません。子どものとき母が死んでから家を飛び出した。14 歳から 19 歳まで熊本市で店員をしよった。それから呉服店にいつときおって、質屋と菓子屋なんかもやりよった。高千穂用水ができたとき、その請負師が知った人で、その事務所に行きたい。事務所は笹の都、天岩戸の上(小学校の横)に馬検所があった。そこを事務所にしていて。工区が 1 里半から 2 里と長かったので、ここを 1 日に見て回る。工事は 2 ~ 3 年かかった。そのとき、カツヨを嫁にもろた。大正 9 年 2 月に結婚。カツヨは皿糸出身。政市君の隣の家の生まれ。工事が終わらんうちに、政市君(明治 30 年 7 月生)が「かな山に来んか」「そんなら行こか」で鉱山にでた。鉱山に行ったところが、喜右衛門が監督で、「坑内に入ってくれ」。二番坑に入った。採鉱はそれまでしたことはなかったが、簡単なもんです。半年くらい坑内におった。(略)

土呂久鉱山には足掛け 3 年くらいおった。大正 14 年 10 月ごろまで焼いたところが、薫ちゅう女の子ができた。そのころ岩戸の甲斐嘉市(塩井宇層の出)が「炭鉱に来んか。金になるぞ」と誘うてくれた。子どもに悪いちゅうんで、「土呂久はやめよ。毒薬つくるより、やめた方がよかろう」。昭和元年から三井田川に来た。鉱山では 1 日 50 銭か 60 銭。炭鉱では 1 円から 1 円 50 銭、金もだいぶ違う。

佐藤繁熊さんの場合

「口伝 亜砒焼き谷」P40

繁熊少年がまだ小学生のころ、一家は四季見原に住んどった。国がその何百町歩もの山を国有林にして、造林する計画を立てた。住民はだいぶ反対したが、力づくで追われてしもた。土地は国が借りあげて、代金を 50 年後に返済するちゅう無茶な話よ。

(父親の) 虎四郎さんは他の山を買いうち移ることにしたが、なにしろ金がねえ。羽振のよかった(従兄弟の) 喜右衛門さんから 600 円を借った。その返済のために、繁熊少年は喜右衛門さんの配下で「手子」と呼ばれる鉱石運搬夫として働くことになった

んじゃ。同じ手子仲間に、一つ年上の実雄さんがおった。

5 2 - 3 請負い労働

佐藤繁熊さんの話（1976年聴取）

最初は運搬だったが、あとで請負いになった。百貫箱いっぱいにして70銭、それから75銭になり80銭になった。市蔵さんが二番坑の亜ヒ焼きをやっている、この人が鉱石を受け取って、運搬量を調べて、事務所で清算した。野村カタさんが事務所をとりしきった。

百貫箱をいっぱいにするのに、慣れんうちは10回から12回かかりよった。要領もよくなり、力もついてきて、1日150貫、月に4500貫以上運び出していた。要領というのは、塊鉱も粉鉱もホッパですくって入れるんだが、塊鉱はなるべく平たいのがいいわけですね。そっと百貫箱に入れると、中にウツロができて、百貫というても、正味80貫しかないかもしれん。塊鉱だけとか、粉鉱だけとか運んだ。

1年半くらいしたとき（大正13年10月ごろ？）賞金がつけられて、15人運搬夫がおれば、最高に運んだ人は名札が一番上になる。トップには100貫につき5銭の賞金がつく。さらに3000貫以上運んだ人に、100貫につき5銭ずつの賞金がついた。私は月に4000貫も5000貫もあげますからね。そのころ100貫もつき80銭だから、10銭ずつプラスして、トップを盗ると90銭になる。その代わり、ご飯を食べる時間がないくらいやらねばならんですね。昼も10分と休みをとらずに、人より3回余計に運びよったですね。朝、人が来る前、真っ先には行って1回運ぶ。みんなが来た時、先頭にはいる。午後はいちばん最初には行って、いちばん最後まで運ぶ。坑内は狭いから、順番を追い越すことはできんわけです。実雄さんとはいつも競争した。25日までほどっこいどっこい。最後の4、5日で私が抜いて最高をとったものですよ。

2年半で借金の600円を返した。鉱夫にならんか、と言われて、1か月半くらい見習い鉱夫をやったが、日当が1円20銭、その代わり仕事は運搬の3分の1。このまま鉱夫になれば、人柄は悪くなるし、胃が悪くしてですね。栄養も足らん、最低生活だった。カーバイト代も入れて、月に13円以内でおさめる方針でやったから、ぜいたくはできない。

5 2 - 4 鉱山経営の仕組み

佐藤喜右衛門の役割

木山今朝市さんの話（1979年11月7日聴取）

喜右衛門は鉱山の監督みたい。人の出し入れ、人の指図、1人でしよった。

鉱山経営は誰がやりよったんか知らん。「(亜ヒ酸を) 少しずつ体に入れて食べたらよい」というんで、みんな食べよった。わしは、食べたこたない。

野村鉦業所について

大正 13 年の花見の写真のハッピーに「九州興産商会野村鉦業部」とある。

佐藤繁熊さんの話（1976 年に聴取）

「野村鉦業所」というのが鉦山の事務所にあった。はじめ、佐藤一郎さんが責任者でおられた。それから川田さんに代わり、鉦夫は野村鉦業所の従業員になった。

佐藤実雄さんの話（1977 年 5 月 3 日聴取）

ハッピーの裏に大きく「の」の字が書いてあった。

「日州新聞」大正 14 年 6 月 3 日夕刊

去る 4 月 6 日、西臼杵郡岩戸村土呂久佐藤一蔵方の黒牡牛 1 頭が死んで以来、同地に於ける野村鉦業所のアヒサン工場が問題の中心になった。